



史跡大庭鶴塚 発掘調査報告

昭和54年3月

松江市教育委員会

はじめに

大庭鶴塚といえば金鶴伝説にまつわる古墳として古くからその名が知られ、県道脇の水田中に所在してその偉容を誇り、さすがに長者の墓であると思われますが、発掘調査というものはかって一度もなされたことがないかなる豪族の墓であるかは全く幻のペールに包まれたまままでありました。

このたび、はからずも宅地化の進行、ほ場整備の実施など周辺の開発の波からこの古墳を将来へと保護していくためにはんの一部でありますが墳丘をとりまく水田地に調査の手が加えられたことは、調査の結果はもとより今後の埋蔵文化財保護の一つの指針を示したものとして高く評価されるであります。

終わりに、この調査にあたって協力された土地所有者や作業員の方々に木紙を借りて深く感謝の意を表する次第であります。

昭和54年3月

松江市教育委員会

教育長 内川 榮

凡 例

1. 本書は、松江市教育委員会が国庫補助事業として総事業費 150万円により昭和53年度に実施した国指定史跡大庭鶴塚の発掘調査報告書である。
2. 本書の編集は、島根県教育委員会文化課埋蔵文化財係長勝部昭氏の御指導を得て、松江市教育委員会社会教育文化係主任岡崎雄二郎が行なった。
3. 調査にあたっては、島根大学考古学研究会の片山泰輔君と赤沢秀則君の協力を得た。
4. 墳丘の測量にあたっては、島根大学教育学部学生若島一則君と作業員青木博氏の協力を得て作成した。
5. 遺物の整理と実測は主として作業員青木博氏が行なった。図面の浄書と写真撮影は岡崎が行なった。

目 次

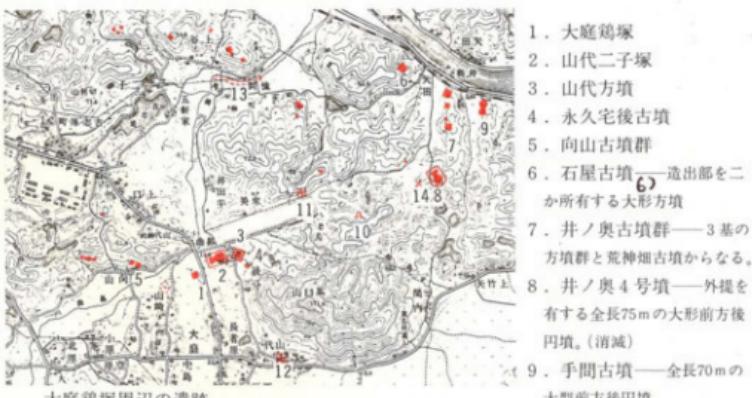
1. 調査にいたるいきさつと経過.....	1
2. 各調査区の概要	4
3. 古墳の構造について	10
4. 遺 物 の 観 察	12
5. 小 結	15

1. 調査にいたるいきさつと経過

本古墳は松江市の南の郊外にある茶臼山の北西部山すそに所在する。指定当初の地籍は松江市大庭町字茶臼1595番地、同8番地である。

南部から伸びた舌状台地の先端を切断して古墳の墓域を区画しその内側に一辺約42m高さ約10mの方墳を築き、更に墳丘の南辺と西辺にそれぞれ台形の造出部を有するものである。大正7年に梅原末治博士により学会に紹介されるなど出雲地方における古墳時代中期の方墳の代表例としてよく知られている。大正13年12月9日には国の史跡に指定された。

本古墳周辺には、県道をはさんだ東側の丘陵突端に山代二子塚（全長90mの前方後方墳で二段築成、空濠がある。）山代方墳（一辺45mの方墳で二段築成、周濠を有し、主体部は切石造りの石棺式石室である）永久宅後古墳（墳形、規模は不明であるが、最も精美な石棺式石室を有する。）と国指定史跡となっている大規模な古墳が近接している。北側の向山丘陵には、向山古墳群（方墳2基）があり、水田をへだてた西側の低丘陵突端には直径5～6mの小規模墳がいくつか所在する。又、南部の丘陵畠地からは古墳時代から奈良・平安時代にかけての須恵器・土師器片が多数散布している。このように本古墳周辺一帯は、松江周辺において古墳文化が最もよく発達した地域として有名である。



10. 十王免横穴群—石棺、壁画、石積施設を有する。
11. 山代郷新造院—日置君目烈が建造。
12. 山代郷新造院—般石郡少領出雲臣弟山が建造
13. 石台遺跡—繩文前、後、晩、弥生、古墳時代の低地遺跡
14. 平所(ひらどころ)遺跡—6C前半頃の形象埴輪窓跡

指定後60年近くを経た現在では、古墳周辺の宅地化が急速に進み古墳北東の県道沿いには大規模なマンションが建設されるなど水田地が年々狭められている。又、古墳の西側と北側の水田一帯は昭和53年度から3か年計画で「大庭地区は場整備事業」が開始されている。

松江市教育委員会では、こうした周辺の開発から本古墳を将来にわたり保護していくために種々検討を重ねた結果、從来から周濠があるのではないかと推定されている墳丘周辺の水田一帯の発掘調査を実施し周濠の有無を確認しもって本古墳の墓域を確定し、将来の保護計画の基本資料とする必要が生じた。そこで、国及び島根県補助金を得て昭和53年度において総事業費 150万円により発掘調査を実施した。

発掘調査は、昭和53年10月12日から昭和53年11月11日までの内、計20日間を費やして行なわれた。調査を担当したのは松江市教育委員会社会教育課文化係主事岡崎雄二郎で、検出した遺構と遺物については国立島根大学法文学部歴史学研究室講師の渡辺貞幸氏の助言と指導を得た。現地調査の後、昭和54年1月まで遺物と図面の整理を行なった。調査区は、墳丘中心部から放射状及び平行に延ばした線上の水田地に幅2mと4mのトレーナーを計13か所設定し地山面まで掘り下げた。発掘した総面積は、314.4m²である。

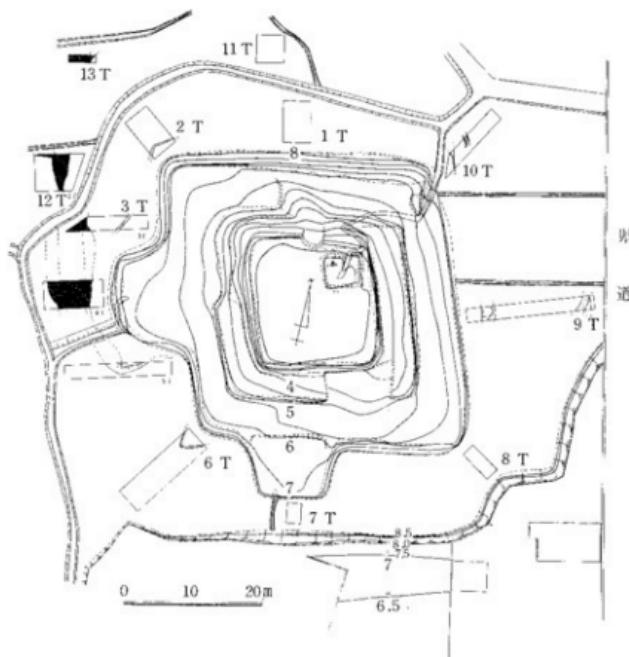


図1. 発掘調査成果図



図2. 塗丘東西断面図

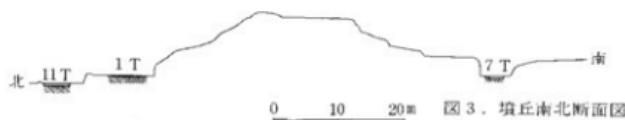


図3. 塗丘南北断面図

2. 各調査区の概要

1 T 表土は耕作土層で厚み15cm内外あり、小礫と円筒埴輪の小片を若干含む。第2層は地山を形成する灰白色～黄色の砂礫層で非常に硬い。加工した形跡は何ら認められなかつた。

2 T 表土は厚み30cm余りの耕作土で、暗灰色を呈し小礫と円筒埴輪の小片を若干含む。第2層は灰白色～黄色の砂礫層で地山を形成する。トレンチ内の墳丘側に高さ16cmの低い段が検出された。鈍角をなして折れ曲がっているが、墳丘北西角部の本来の位置であるのかあるいは墳丘築成の過程で形成されたものか不明である。

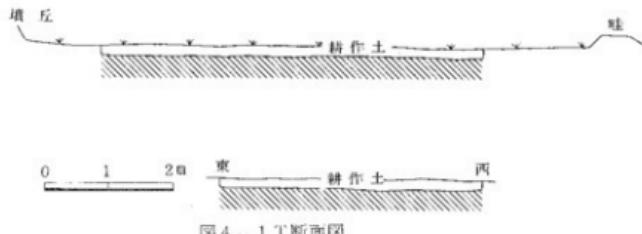


図4. 1 T断面図

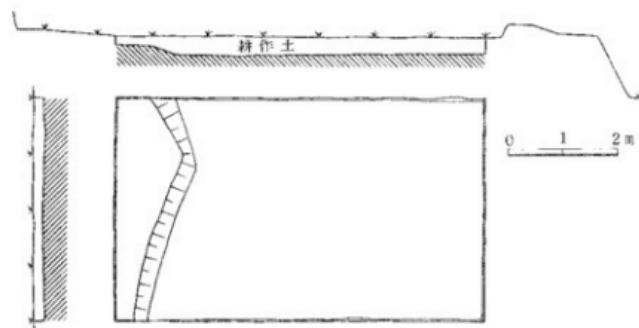


図5. 2 T断面図

3 T 表土は耕作土で厚み平均15cmを計る。第2層は、厚みの余りない暗褐色土層となっている。この層の下部からは円筒埴輪片を出土するが、墳丘側にいくにしたがってその出土量は多くなる。第3層は、灰白色の砂礫層で地山を形成する。

墳丘下端から約5m外側で、落差11cmの低い段が確認されたが、墳丘西の造出部の立ち上がりの線になりうるかどうか不明である。トレンチ西端では深さ50cmの深い溝が検出さ

れたが、これは4 Tで後述するところの溝に連続するものと考えられる。

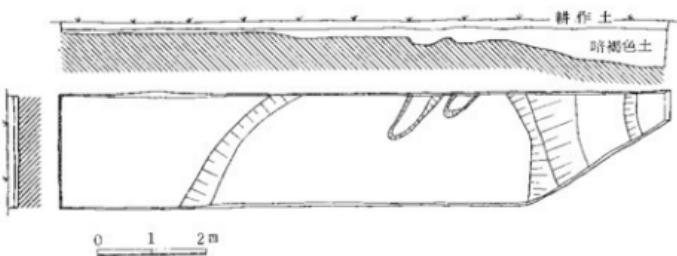


図6. 3 T実測図

4 T トレンチ中央部において南北に走る幅広い溝が検出された。南壁での上端幅4.3m 下端幅2.56m、深さ30cm近くを計る。北壁線上では上端幅6.56m、下端幅3.56m、深さ50cm余りを計る。深さは、予想より浅く北側へすすむにしたがい幅は増し底のレベルは下がる傾向にある。底にはほとんど遺物は含まれていなかった。

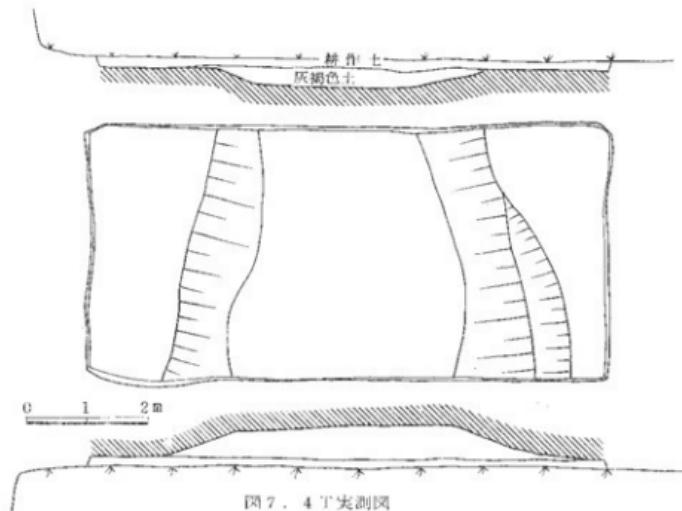


図7. 4 T実測図

5 T トレンチ中央部で地山の変化がみられた。すなわち、「く」の字形を呈する段が検出された。上端の線は4 Tの方向へほぼ直角に折れ曲がっている。上端と下端の高低差は約30cmある。この段は、墳丘とトレンチの位置関係から判断すると墳丘西の造出部の基礎

部分と思われる。とすれば、当初の造出部の姿は先端に向けてかなり開いていたものであったと思われ、現在のような逆にすぼまった形態になったのは後世水田耕作や霜くずれなどによって年々填丘側へ浸食が進行してきた結果に他ならない。

トレントの填丘よりでは耕作土直下の暗褐色土層中から多数の円筒埴輪片が検出され、一部では比較的まとまった状態で発見された。填丘上段から落ち込んだものと考えられる。

6 T トレント内の填丘側では鋭角をなす地山の基壇角部が検出された。高さは20cmある。填丘の西南角の本来の位置になるであろう。この基壇から外方へ約4mほどの区間は平坦でその外側は10cm余り高くなっているが、濠と呼ぶには浅すぎる。耕作土下の暗灰色土層からは須恵器と円筒埴輪の小片が発見された。

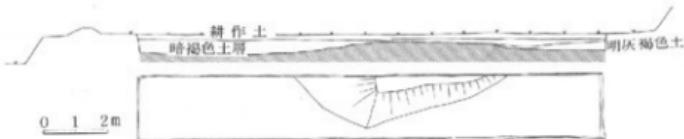


図8. 5 T実測図

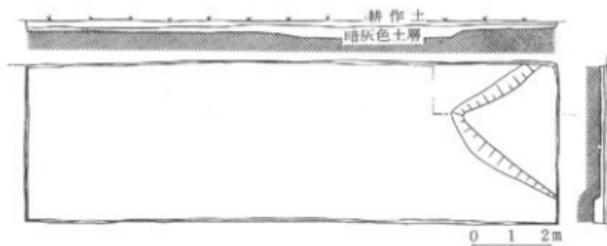


図9. 6 T実測図

7 T 耕作土の厚みは平均30cmほどを計り、その直下は、礫混ヒリの黄色粘性土に到達した。地山である。地山を更に深く掘削した濠は認められなかった。このことから、墳丘と舌状台地の間は4.5mの幅で台地を掘削して墓域を区画しただけでことさら深い濠はつくりていないことが分かった。このトレンチからは須恵器の器台と大形甌の破片が出土した。

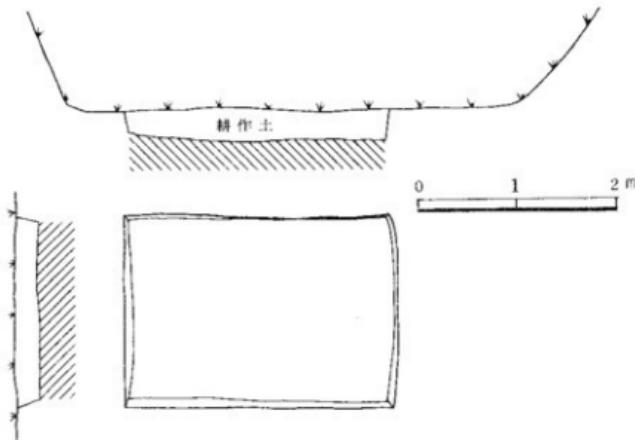


図10. 7 T 実測図

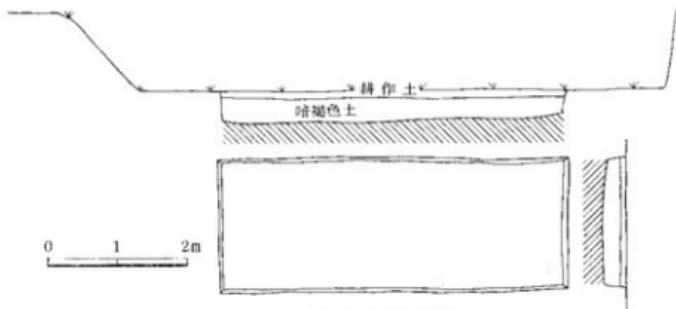


図11. 8 T 実測図

8 T 表土は、耕作土で厚み10cm、第2層は暗褐色土で厚み30~36cmを計る。最下層は淡黄色軟砂岩層で地山を形成している。地山面は平坦であるが墳丘側と台地よりでそれぞれ10cm位は高くなるようである。7Tの状況と同じく、台地を切削して墳丘を区画したのみで、ことさら深く濠を掘削した形跡はない。

9 T トレンチ内の墳丘側では、表土は厚み16cmの耕作土、第2層は厚み26cmの暗褐色土。第3層は黄褐色の粘土質土で地山を形成している。この地山は、墳丘下端から約3.5mトレンチ内に入いった地点で徐々に落ち込み、更に1.6~1.7mの幅をもち下端となっている。この落ち込みは大変ゆるやかなもので加工した形跡はない。トレンチの東端付近ではかなり急傾斜の立ち上がりが認められたが当初の自然地形を考えるとこれは墳丘東側の舌状丘陵の突端付近の地山の立ち上がりと考えられこれも人為的な段ではないだろう。第2層と地山の界面からは江戸時代初期の陶器片が含まれていたので、地山面までは、近世に手が加えられたことが考えられる。



図12. 9T実測図

10 T トレンチ内の墳丘側に、高さ平均56cmの段が認められた。更にこの段から約1.6m外方に上端幅0.7m、下端幅0.4m、深さ0.1m余りの細い溝が検出された。これらはいずれも墳丘東辺に平行するもので、人為的に手の加えられた遺構である。東辺の9Tでは殆んど溝らしきものはなかったので、この段と溝は9Tと10Tの中間から始まっているものと思われる。10Tの西側でこれらの遺構が墳丘に沿って屈折するかどうかは確認していない。

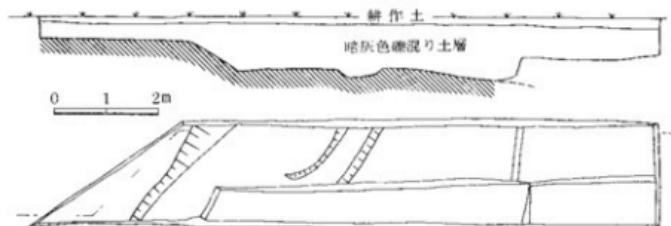


図13. 10T実測図

11T レンチの位置は塡丘北辺の下の段の水田中である。1T付近の上の段の水田高より1.25m低い水田面である。表層は耕作土で厚み約20cm、第2層は暗灰色粘土質土層で厚み約10cm、第3層は褐色粘土質土層で厚み約18cmと続き、その下層、つまり水田面からおよそ50cm位で小礫混じりの黄褐色粘土質土層に達する。殆んど平坦で、変化は認められず地山を形成しているものと思われる。

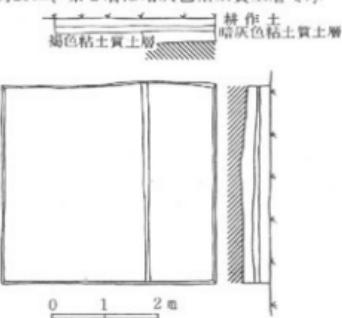


図14. 11T 実測図

12T 3Tと4Tで確認された溝の行方を追って2Tと3Tの中間で、一段低い外側の水

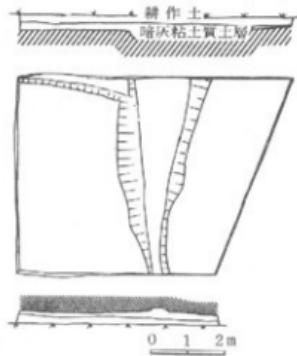


図15. 12T 実測図

田中に設定したレンチである。レンチの中央部で南北に走る溝を検出し予想どおり溝が北へ延びていることが確認された。レンチ南壁の上端幅56cm、下端幅28cm、深さ約10cmを計る。北壁での溝の上端幅は2.25m、下端幅1.5m、深さ20cmを計る。4Tの溝と同様、底が浅く平坦な形態を示し、更に北方へ続いているようである。

トレンチの東端で落差14cmの段を検出した。
12Tで確認した溝の末端部分と考えられる。

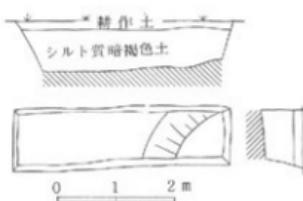


図16. 13T 実測図

3. 古墳の構造について

本古墳は、現状で南北辺42~44m、東西辺40~42m、墳丘周囲の水田面からの高さ約10mを計る。更に、南辺と西辺にそれぞれ台形状の造出部を設けている。すなわち、南辺のものは基部の幅14m、先端幅10m、長さは8m余りある。西辺のものは南辺の造出部よりや、大きく基部の幅16m、先端幅12m、長さは8mある。高さは、墳丘外まわりの水田面から平均3.5mを計る。墳丘の構造や築成過程の様子については発掘調査を実施していないので、今回の調査結果と表面上の形態観察により古墳の構造について若干述べておく。

墳丘 墳丘は現状では3段を呈しているが、本来は2段築成のものであったらしい。というもの、地元の方々の話を総合すると明治以後畑に開墾されたり墳丘の一部を削平したりして老人の住む小屋が建ったり、戦時中には対空監視所があったそうである。いま、墳丘を測量してみるとこれらの改変の跡がよく分る。すなわち墳頂部は、一辺17×18mの平坦面を呈しているが北東角に一辺5m余り、高さ50cmばかりの方形壇があり歳の神さんが祀られている。この壇は墳頂部が畑に利用するなどして削平された折に、信仰の対象として残されたようであり、墳頂部の高さは、本来は少なくともこの壇まであったと推測される。

又、墳丘の2段目の東南部、西部、北部及び南の造出部の基部にそれぞれ後世削平されたと思われる切り取り部が認められる。これら後世の改変部分を復元してみると北辺は2段であるのに対して他の3辺は3段をなし極めてちぐはぐな形となる。当初の姿は2段であったのか3段であったのかという点に問題は残してきた。そこで、斜面に点在する葺石の分布を調べてみると、墳頂部直下の斜面には全く葺石は認められない。これに対して2段目と3段目の斜面には葺石が点在する。したがって墳頂部直下の斜面は後世削平されたことによるものと思われ、本来は葺石を有する2段目と3段目の斜面の2段築成であったことが知られるのである。葺石は、人頭大の角ばった石を3~5段積みに積み上げたもので石垣と称したほうがより適切であろう。

造出部 現状の規模と形状については前述のとおりであるが、今回の発掘調査では5Tにおいて高さ30cmの地山を切削した段が検出された。この段は西造出部の本来の基壇を形成しているものと推測される。この基壇は4Tにおいては溝の墳丘側の上端の線と合わざるものと考えられる。3Tにおいて基壇に該当する遺構は認められなかったので、西造出部の北側角部の線は、3Tと現在の造出部の中間に想定することが出来る。

全体としてみると本来の平面形は現在の形とは逆に前方に広がる台形となり、その推定先端幅は約20m、奥行は12mとなる。

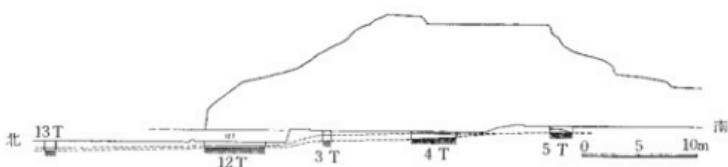


図17. 塚の南北断面図

南の造出部については調査区が狭小であり、本米の形状が現在形と異なるものであったかどうかは不明であるが、7Tの調査結果をみると基壇らしきものもなく平坦な地山があるので、その長さについては現状ほとんど変化がないようである。左右両翼の形状については、西の造出部の如きであったかどうか未調査である。

塚 墳丘の外周に畦でとり開まれた水田がめぐっており、この部分に濠があるのではないかと推定されていた。今回の調査の主たる目的は、この濠が果たして存在するのかどうか、あるとすればどの位置にどういう形のものがあるのかということであった。

調査の結果については、各調査区の概要の項で述べたとおりである。つまり墳丘の西側3T、4T、12T、13Tに認められ、ひと続きの濠の存在が確認されたが、それ以外のトレーナーでは全く検出されず周濠というべきものは存在しなかった。

4Tと5Tの中間で始まった西側の濠は徐々に濠底のレベルを下げながら北へ進み馬橋川へ合流したものと思われる。とすれば、古墳の墓域を区画するとか、水を常に溜めておくことの出来る周濠という性格はうすく、むしろ排水機能に重点を置いた濠というべきものである。墳丘南側は、南部から延びる低平な台地の先端を切削している。南の造出部で6m、その他の南辺で12mの幅を切削し台地を切り離している。この部分の調査区6、7、8Tの各区では、地山は平坦なままであり、いわゆる濠というものは存在しない。

まとめ 本古墳は基本的に方形プランを呈するが、墳丘の西辺と南辺に造出部を設ける特異な古墳である。発掘調査の結果、西の造出部の平面形は現状とは逆に外方開きの台形を呈するものであることが判明した。

この造出部の平面形態は、前方後方墳の前方部の形と相通するところがあるが、そうした場合、後方部に対する前方部の比率は非常に小さいものとなるのでやはり方形部に造出部が付設されたものと考えたほうが適切であろう。

方形墳にこうした造出部を設けた例は、昭和53年に発見されその後国指定史跡が確定と

なった松江市東津田町所在の石屋古墳が挙げられる。石屋古墳の場合は、墳丘の北辺と南辺にそれぞれ付設されているが、北辺のものは、大庭鶴塚の西辺の造出部と同様ではほぼ一辺の中央部にあり、南の造出部は、いずれも中心線より西寄りに設定されておりそれと共通する現象として注意される。

次に墳丘の下端の線を見てみると、東西辺と南北辺は通常の方墳のように直角に接続するのではなく約12°ほど歪んでいるのであって、全体としては正方形というよりは菱形に近いものである。このことは、従来あまり注意されていなかったことであり墳丘を築成する場合の設計ミスということも考えられなくもないが、安来市荒島町に所在する造山第1号墳の場合も同様に歪んでいるのであって、何か企画上の特別な制約があることと思われる。²⁾

4. 遺物の観察

各調査区からは一様に須恵器の表片と円筒埴輪片が出土している。これらはもともと墳丘上にあったもので恐らく後世の擾乱時に墳丘外へ盛土と共に落とされたものであろう。

当初予想していた形象埴輪は全く発見されなかった。これら採集遺物の内、主なものについて述べておく。

須恵器 1は7Tから出土したもので、底辺・高さ共に4.5cm前後の三角形透しを千鳥格子状に配置した器台もしくは脚付壺の脚部の破片である。外面は浅い凹線文で区画した内側に細かく浅い縦長のクシ彫波状文を施している。内面は細かい横方向のナデ調整をおこなっている。器表面は灰色を呈し胎土は緻密で砂粒は殆んど含まれていない。器肉の厚さは1.3cmほどである。

2は同じく器台もしくは脚付壺の脚部の破片で外面は幅の太い2条の凹線文の下部に細かい波状文を施したもので、ヘラ切りの面から推測すると縦に細長い長方形透し又は三角形透しを有するものである。内面は細かい横方向のナデ調整をおこなっている。胎土は緻密で灰色を呈する。

3は器台の脚端部と思われるもので脚端径24.2cmを計る。断面は比較的古い段階の須恵器の高环の脚端によく似ている。胎土は、精選されて緻密で砂粒は殆んど含まれていない。

4、5は共に7Tの耕作土中から出土したもので、大形壺の胴部の破片である。外面は平行線文をつけ、内面は同心円文を押し当てているが部分的にナデで消去した形跡がある。**5**は、この技法が逆でヘラで削った後、同心円文を押圧している。器肉は1~1.2cmあり

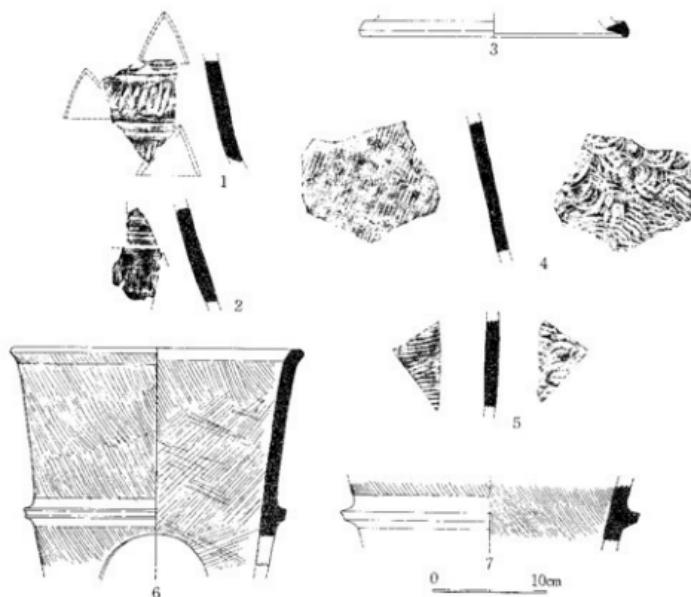


図18. 出土遺物実測図

胎土は精選されている。同種の甕の破片は7 T上の南の造出部付近からも採集されている。

円筒埴輪 6は5 Tの墳丘寄りの暗褐色土層中から比較的まとまった状態で発見されたものである。下半部から口縁にかけて徐々に外方へ開く類のもので口縁径26.4cmを計る。口唇部は一段と外方へ開き内面にかけて指ナデ調整が行なわれ、口唇部上面がわざかに凹んでいることが注意される。口縁端から15cm下には台形状の突帯を張り付けている。突帯は上端の幅0.9cm、高さ0.8cmを計り口唇部と同様指ナデによる整形が行なわれている。突帯の先端には口唇部と同様の凹みが認められる。突帯の直下には直径10.2cmほどのヘラ切りの円孔がつくられている。外面は全て斜方向にナデで調整しているが、それ以前の段階で巻き上げた粘土の凹凸を指で荒っぽく押さえこんだ痕跡が認められる。内面はまず刷毛目状T工具により埴輪に向かって左下から右上へナデ上げたのち、逆に右下から左上にナデ上げていることが分る。

7は9 Tの耕作土層中から出土したもので突帯の部分である。製作技法は6とあまり変

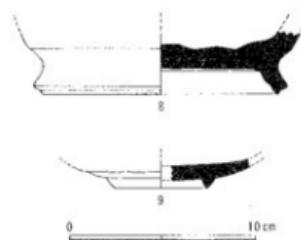


図19. 須恵器・陶器実測図

(図19-8) 又9Tの地山直上の暗褐色土層中からは江戸時代前期の陶器の碗の底部が発見されている(図19-9)。更に13Tからは土師器の高环の部分の破片が発見されているが細片で実測不可能である。破片を観察すると突帯の退化した段階のものであることが分る。

わらないが、突帯はや、垂れ下がった形をとる。又、全体として灰褐色を呈し、還元炎に近い状態で焼成されたためか、非常に堅く須恵器質となっている。

その他古墳とは無関係と思われる遺物としては次のような土器類が発見されている。すなわち、4Tの漆内明褐色土層からは奈良時代の高台付の壺の底部が発見されている。

5. 小 結

今回の調査の主たる目的は、墳丘水田地における濠の実態の究明にあった。調査に入る前は、墳丘をとりまく水田地が細長くその上墳丘の外郭線とほぼ併行に咲畔で区切られていたことから、その水田地の地下に周濠が埋没しているのではないかと推定されていた。しかし調査の結果、周濠は存在せずわずかに墳丘西邊に併行する濠が確認されたに過ぎない。この濠は4Tと5Tの中間で始まり、4Tにおいては上端幅4~6m、深さ30~50cmを計り、底が平坦かつ浅い濠であることが注意される。この濠は3T、12T、13Tでも検出され、連続していることが確認されたが、北へいくにしたがい濠底のレベルが下がる傾向になり、しかも11Tで全く確認出来なかったことから墳丘北側へ曲折している可能性は極めて薄い。ところで、12Tでは濠から西方へは直角に接する小溝が部分的に確認されているが、これは恐らく古墳西側にあった当時の谷間水田からの排水路ではなかつたかと思われる。したがって、この濠は墓域を区画するためというよりは古墳及び西側水田地の排水のために掘削された可能性が強いであろう。

今回の調査では墳丘及び主体部は調査対象としなかったため、遺骸と共におさめられた副葬品など古墳の築造年代や被葬者の性格を知る上で欠かすことの出来ない遺物や遺構は知る由もないが墳丘測量の結果や各トレンチから出土し本古墳と関係があると思われる土器類の観察から古墳の構造や築造年代について少し考えてみたい。

まず、古墳の構造であるが、既に詳述したところであるのでここでは主な特徴を列記してみると次のとおりである。

1. 南から派生した舌状台地の先端を切削して切り離したのち、墳丘の基盤を整形していること。
 2. 墳丘平面は、正方形というよりは菱形に近い形であること。
 3. 現在はあたかも3段築成の如き様相を呈しているが、3段目の斜面は後世掘削した結果によるものであり、築造当初は2段築成であったこと。
 4. 各段の斜面は、石垣状の粧石により構成されていること。
 5. 墳丘の西邊と南邊に築造当初から造出部を設けている。この内、西邊の造出部は当初は外方開きの平面形であったこと。これら造出部の特徴は、松江市東津田町所在の石垣古墳の造出部に極めて類似すること。
- 以上のような特徴を有するが、特に2と4と5の点について極めて特異な方墳ということが出来る。

次に出土遺物の検討から古墳の築造年代を考えてみる。

出土遺物は、各調査区から須恵器片と円筒埴輪片が出土しているが殆どのものが細片のため全形をうかがい知ることの出来るものはない。したがって図にかけた遺物のように破片ではあるが比較的年代観をよく表わしていると思われるものに限って取り上げて検討してみたい。

器台又は脚付壺の脚部 四線文やクシ描波状文は浅い施文で不鮮明な部分もある。四線文の間に鋭い三角状の突帯というものはない。少なくとも古式の須恵器とはいえない。

大形壺の胴部 内面の同心円文は完全に消去されてはいないが部分的にナデで消している。同心円文は浅く当てがわれ 6世紀後半頃の壺のように深くはっきりとした文様ではない。

以上のように七器の観察から、特に大形壺の内面同心円文の形態から本古墳が築造されたのはほぼ 6世紀中葉をさほど前後しない時期に求めてよいだろう。

ただし、出土土器は墳丘外の水田地からのものであり、主体部の副葬品ではないことと墳丘上での墓前祭祀に使用されたことも考えられるものであり、築造時点から少し後の時期に供獻されたことも十分考えられるところである。

いずれにしても、本古墳は一辺40m余り、高さ10mの規模を有し、県内に所在する方墳のうちで第6番目の規模を誇るものである。さらに、本古墳の周辺には東部、茶臼山の山裾に山代二子塚（現在長約90mの前方後方墳・国史跡）、山代方墳（一辺45mの方墳・国史跡）、永久宅後古墳（墳形・規模共に不明、石棺式石室あり、国史跡）がありいずれも県内A級の規模と内容をもつものである。このことから考えると、本古墳は大庭地区はもとよりその周辺の地域をも掌握していた大豪族の長の奥津城ではなかったかと推測される。

注 1) 梅原来治「丹波国南桑田郡篠村の古墳」（『考古学雑誌』第9巻1号）

2) 山本清「古墳」（八雲立つ風土記の丘周辺の文化財所収）鳥根県教育委員会
昭和五十年

3) 注2) に同じ

4) 注2) の山代円墳と称されている古墳と同じ。

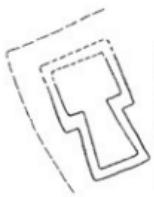
5) 鳥根県教育委員会文化課埋蔵文化財係長藤部昭氏の御教示による。

6) 囲崎雄二郎「松江市石屋古墳の調査」（『考古学ジャーナル』1979年3月号所収）

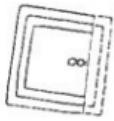
7) 鳥根県教育委員会編「島根の文化財 第三集」所収 昭和38年。



(国史) 大塚古墳



(国史) 山代二子塚

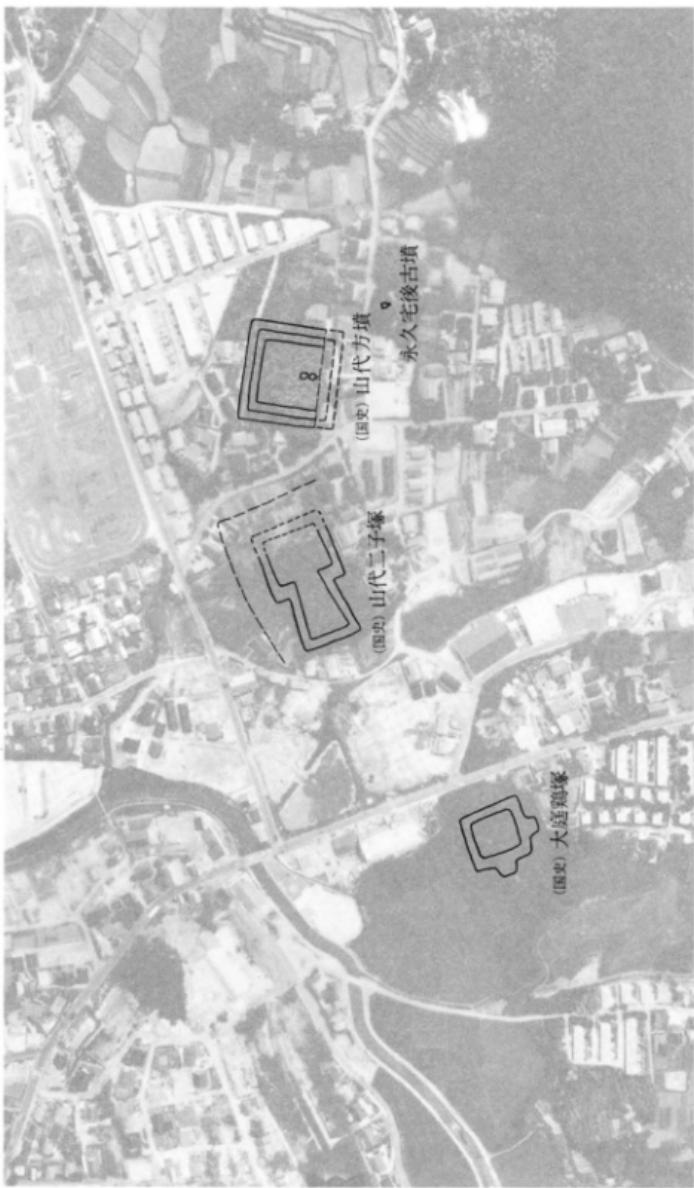


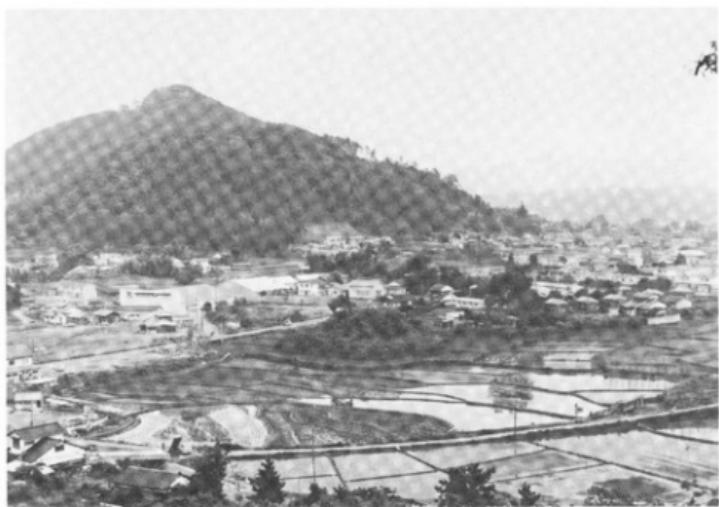
(国史) 山代方墳
永久宅後古墳



大仏堂周辺の古墳分布（航空写真）

大庭鶴塚周辺の古墳分布（航空写真）





鼻曲丘陵から大庭鶴塚を望む（左上は茶臼山）



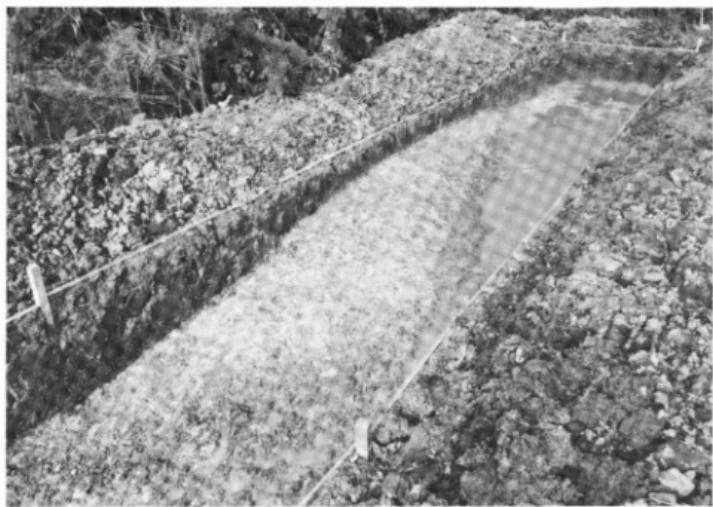
古墳近景—東北からみる—

古墳近景—西北からみる— 右端は、南の造出部、左端は、西の造出部



古墳近景—西北からみる— 右端は、南の造出部、左端は、西の造出部





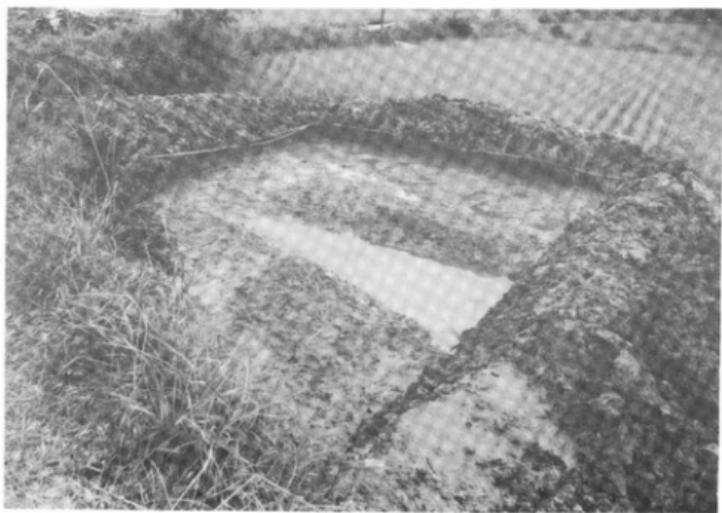
5T 造出部の基礎検出状況—西からみる—



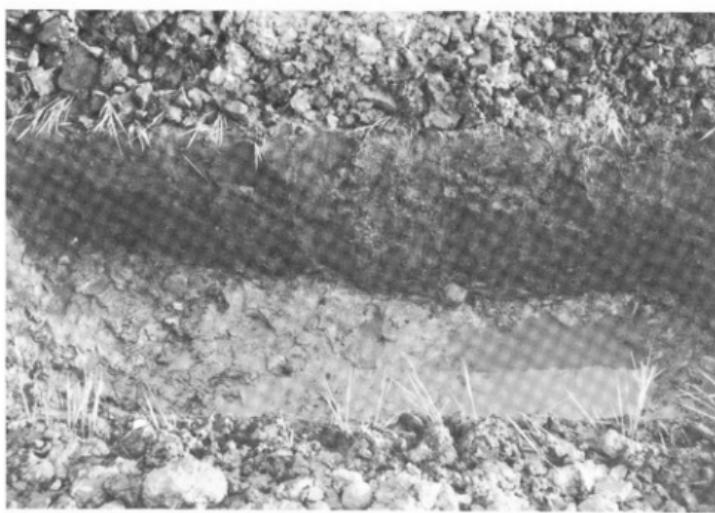
4T の塗 西からみる (前方は塗丘)



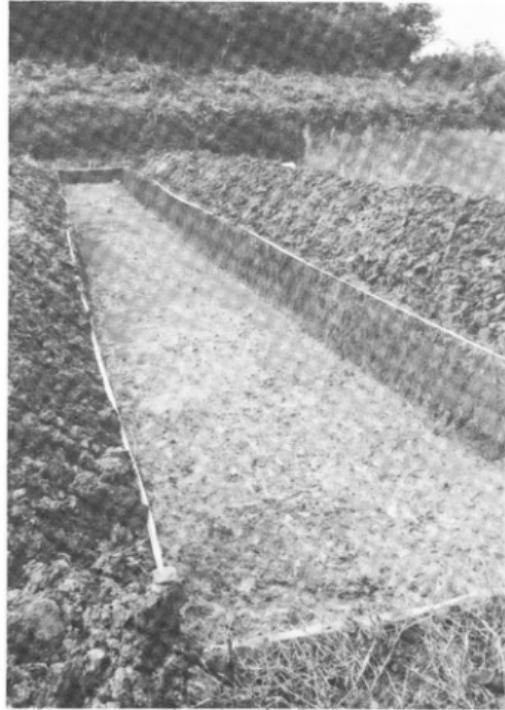
3Tの漆 —北からみる—



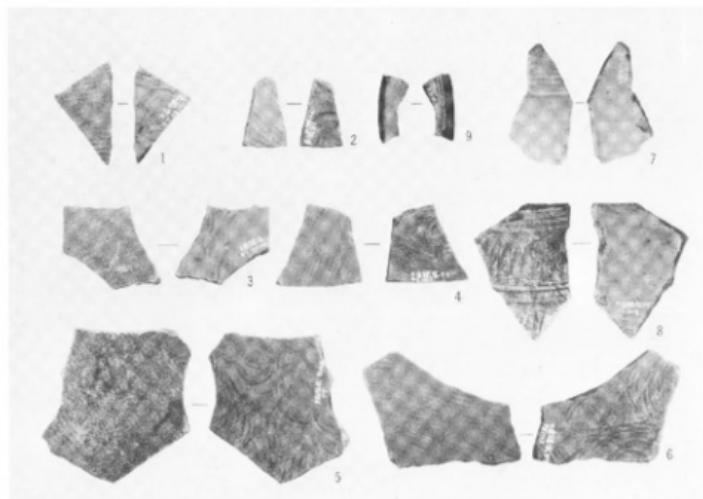
12Tの漆—東北からみる—



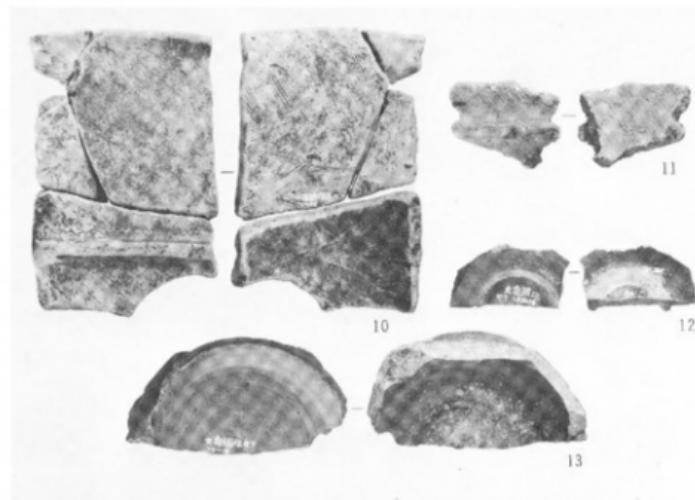
13T の濠—北からみる—



9T 県道からみる
(前方は、墳丘)



須 惠 器 片



圓筒埴輪片，須惠器片，陶器片